



Title	路上生活者支援の宗教性・価値・共同性：ボランティアはなぜお寺でおにぎりを握るのか
Author(s)	河田, 純一; 坂場, 優; 富澤, 明久 他
Citation	宗教と社会貢献. 2018, 8(2), p. 1-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

路上生活者支援の宗教性・価値・共同性

—ボランティアはなぜお寺でおにぎりを握るのか—

河田純一・坂場優・富澤明久・福井敬・宮澤寛幸・弓山達也・渡邊龍彦*

Religiosity / Spirituality, Value and Cooperation in the Homeless Support Why Do Volunteer Workers Make Onigiri in the Temple?

KAWATA Junichi, SAKABA Yu, TOMIZAWA Haruhisa, FUKUI Takashi,
MIYAZAWA Hiroyuki, YUMIYAMA Tatsuya and WATANABE Ryugen

論文要旨

本稿の目的は、東京・山谷地区の浄土宗寺院を拠点に路上生活者支援を行うひとさじの会に焦点を当て、そこに集うボランティアがどのような宗教性や価値を共有し、共同性を醸し出しているかを明らかにするところにある。そのため関与型調査の方法を模索し、Tled 法を開発して本稿に実装した。その結果、この路上生活者支援がもつ宗教性・価値・共同性について相反する性格を見出した。

キーワード ボランティア、路上生活者支援、宗教性／霊性、関与型調査、Tled 法

In this paper our purpose is to show what types of religiosity / spirituality, values and cooperation volunteer workers share and how they share them, focusing on *Hitosaji-no-Kai* (one spoon club) based in the *Jōdō Shū* temple in Sanya, one of the biggest flophouse areas in Japan. We explore the use of an intensive "researcher in the loop approach" and develop the Tled Method for this paper. We found contradictory or conflicting characteristics among these homeless support volunteers regarding religiosity / spirituality, values and cooperation in their movement.

Keywords: Volunteer, Homeless Support, Religiosity / Spirituality, Researcher in the Loop Approach, Tled Method

* 河田純一：大正大学大学院・博士課程 2 年 jup.kairo@gmail.com 坂場優：大正大学大学院・修士課程 2 年 rtlevi123@yahoo.co.jp 富澤明久：田園調布稻荷神社・禰宜 haruhisa1031@gmail.com 福井敬：大正大学大学院・博士課程 3 年 takahu07@gmail.com 宮澤寛幸：産業カウンセラー introzeption@yahoo.co.jp 弓山達也：東京工業大学・教授 bxm02263@nifty.com 渡邊龍彦：大正大学大学院・修士課程 2 年 ryu.ryu.0705@gmail.com

1. 問題の所在

1.1 本研究の目的と背景

本稿の目的は、第一に東京・山谷地区の浄土宗寺院を拠点に路上生活者支援を行うひとさじの会に焦点を当て、そこに集うボランティアがどのような宗教性や価値を共有し、共同性を醸し出しているかを明らかにするとところにある。ひとさじの会は、毎月2回の活動には約20～50名が関わり、同地区の宗教系のボランティア活動の動員〔渡辺 2010: 256-272〕と比較すると、最も規模の大きい団体である。しかし同時に同会は参加者の背景を問うことなく活動が可能で、そう考えると上記の第一の目的は、なぜ宗教性や価値を共有せずとも一つの運動体としての共同性を保つことが可能なのか、という第二の問いとして言い換えることも可能である。

日本においては1995年の「ボランティア元年」以降、ボランティアと宗教との関連が研究されてきた。三谷はるよ〔2016: 128-129〕は20～69歳2800人に対する郵送質問紙調査によってボランティア活動参加が宗教性、特に教団所属はもとより、参拝・祈り・加護観念・信心と強く関係していることを明らかにした。寺沢重法〔2012b〕もWVS（World Values Survey）第2回調査（1990年実施）と第4回調査（2000年実施）をもとに現代日本において宗教施設を定期的に訪れるということが、社会活動への参加に対して独自の効果をもっていることを指摘している。一方、桜井政成〔2002〕はボランティア個人やグループに対する調査票留置法によって、因子分析を通じて自分探し因子と利他心因子という広義の宗教性を導き出している。

このようにボランティア活動と宗教との結びつきは計量的に明らかにされ、阪神淡路大震災後や東日本大震災後における宗教団体・宗教者の活動によって両者の関連はつとに知られるようになっていっているといえよう。だが宗教的な価値観がどのように非宗教者を巻き込み、また宗教関心層と近接するとも言える自分探しの人々がどう宗教に接していくのか、宗教の有する閉鎖性や（宗教を信じていないという意味での）非宗教者の宗教に対する無関心・拒絶感を知る者にとって、両者の関係はそれほど自明ではない。若手僧侶によって始められ9年が経ち、日本有数のドヤ街で、同地域における他の同様の定例夜回り・配食活動と比して、最大のボランティア動員

数を、しかも僧侶の数をはるかに上回る割合で集めるに至ったひとさじの会に、私たちが注目する理由はそこにある。

同時に計量的調査とは異なるアプローチでボランティア活動と宗教との関連を問おうと歩を進めるとき、私たち（宗教者もいれば非宗教者もいる）は、自らが両者の関係のただ中で影響を与え、影響を受けている存在であることに深く気づかされる。こうした自らの存在を無視して、他者の信仰やボランティア活動を記述することは、むしろ不自然なことであり、私たちは調査における自らの立ち位置や、調査の場に影響を与え、影響を受ける存在であることをも含めて記述する必要性を認識するに至った。それはインタビュー法や参与観察とは異なる「関与型調査」とも呼ぶべきもので、その開発と実装は本稿の第三の目的となる。これについては次々節で取り上げたい。

1.2 本研究の対象とする団体とその活動

ひとさじの会（正式名称「社会慈業委員会」）は、浄土宗の若手僧侶たちを中心に 2009 年の 4 月に設立された団体である。ひとさじの会という通称は、法然が弱った人々に一匙の重湯を施した逸話から「食べるのに困っている人に少しでも寄り添いたい」という思いを込めて名づけられている。役員 13 名は全員僧侶であり、そのうち 12 名が浄土宗僧侶である。事務所は、台東区清川にある浄土宗寺院の光照院である。路上生活者への夜回り・配食活動を軸に葬送支援や東日本大震災などの被災地復興支援が行われている。浄土宗内では地域や NPO などと協働しながら路上生活者に食べ物の支援をする団体として認識されている。路上生活者への配食は原則として毎月第一・三月曜日に実施され、2018 年 8 月に 200 回目を迎えた。

光照院がある台東区清川は、日本堤町や東浅草町などとともに 1932 年から 1966 年まで山谷町であった。現在「山谷」という町名は存在しないが、山谷地区は江戸時代には山谷村と呼ばれ、地域区分は多少異なるにしても、江戸時代から大正期にかけて「下層労働者」に木賃宿を提供していた。関東大震災・第二次大戦後には住居の代用として宿泊所を利用する者がそれぞれ増加しつつも、労働者は継続的に宿所を利用していた。特に戦後の高度経済成長期には、産業の労働力需要に従う日雇労働者を供給する街として機能していた[東京都城北福祉センター1971、遠藤 1996、秋山ほか 2017]。

このような歴史的経緯から山谷地区は、生活困窮者が多く居住する地域として知られるようになる⁽¹⁾。

実際に 1955 年前後は生活のために血を売る男性や売春をする女性が多く存在し [遠藤 1996: 192-96]、戦前には欠食児童が、戦後においては家庭の経済的な不安定さによる不就学児童が問題となっている [東京都山谷福祉センター1963: 3、遠藤 1996: 153-157、202-212]。このころ光照院の第 18 世吉水現祐住職も青少年育成の健全な環境作りのため、売春をする女性に仕事と生活とを斡旋したり、子ども会を運営し青少年の教化指導を試みたりしている。彼は、ひとさじの会の吉水岳彦事務局長の祖父にあたる。これら山谷地区住民の生活改善と青少年の健全育成活動について地元の理解と応援もあり、彼は区議会議員にもなっている [吉水 2015: 83-87]。

ひとさじの会の活動と第 18 世住職の活動との直接的な連続性はないが、ひとさじの会に参加している地元に住むボランティアが同会の活動を支えている状況は、光照院が山谷の生活困窮者支援を行っていたこととも無関係ではないであろう。ひとさじの会の設立は、吉水事務局長ら浄土宗僧侶が NPO 団体より路上生活者の葬送支援について相談を受けたことに端を発する。その後路上生活者への直接的な支援として夜回りと配食が開始される。その際に必要な米を、吉水事務局長が滋賀県の浄土宗僧侶に相談したことによって「米一升運動」が始まっている [同: 96]。

ひとさじの会の路上生活者への夜回り・配食活動には、ボランティアの力添えが必須である。参加者は少ない時で 20 数名、多いときには 50 名前後に上ることもある。男女比率は、約三分の二が女性である。長期間参加している者や地元の参加者などには決まった役割も与えられている。ボランティアの内訳は、僧侶、檀家、地元民、会社員、看護師、教員、学生、ベトナム人女性（第一月曜日のみ）、子どもなどである。学生は、ベトナムからの留学生、講義の課題として参加する大学生・大学院生が主である。仏教関連では浄土宗僧侶・檀家のほかに、立正佼成会の会員、日新窟を拠点に活動するベトナム仏教会の信者・僧侶、仏教系大学で個人的に仏教を学ぶ者などがいる。またベトナム人留学生の多くは、SNS でのベトナム人コミュニティで同会の活動を知り参加している。

ひとさじの会の夜回り・配食活動は、15 時からの配食準備より始まる。詳細は後述するが、配食準備は 19 時頃に行われる法要までで一区切りとな

る。この法要では導師より路上生活者に配食する際の留意点が語られる。第一月曜日にはベトナム仏教会の信者が定期的に参加しているが、基本的には配食準備終了直後の18時頃に帰宅する。その後、法要まで参加して帰宅する参加者もいる。その一方で仕事終わりなどに20時から始まる配食のみに参加する者もいる。そのばあいには、浅草の吾妻橋近くにある交番横に集合となる。人数的には配食準備から夜回りまで参加する者が大半であり、22時過ぎ吾妻橋で解散となる。

1.3 本研究の方法

前々節の最後に述べたように、本稿の目的の一つは関与型調査の開発と実装にある。言い換えればフィールドワークの記述を巡って、その記述に調査者の立ち位置や被調査者とのやりとりをどう「書く」か、特に論文にいかにか落とし込むかを実際に行うところにある。

東日本大震災後、多くの宗教研究者がそこで被災者と語り、復興活動に従事し、時には宗教者との共同作業を行いつつ研究を進めてきた。これは1995年のオウム真理教の地下鉄サリン事件以降、それまでの内在的理解に代表される宗教者の信仰形成の内的な論理に迫り、時には自己を重ねつつ記述する研究姿勢から、デタッチメントを旨とするアプローチや自らの価値観を括弧に入れた記述が主流となる中で、大きな逸脱・逆行とも言える。しかし私たちは、被調査者とともにボランティアをしつつも、安易な同調・同化でもなく、また単なる素朴な客観主義とも異なる手法を編み出すことを強く企図した。私たちはそれを「関与型調査」と呼び、宗教研究者が宗教者や行政やNPOや地域関係者などと協働しつつ、現場に従事し、こうした関与から調査を積み重ねるアプローチ法を意識的に目指した⁽²⁾。自らの立ち位置や価値観や利害が問われることは、貧困や医療や地域的課題と取り組む現場—そこでは調査者はマジックミラー越しだったり、透明な存在だったり—が許されない—と宗教研究が共同歩調を取ろうとするとき、必然的に起こることと考えていいだろう。

本稿は2013年から弓山が学生・院生と池袋（TENOHASHI）と山谷地区（山谷労働者福祉会館・山谷日雇労働組合）で路上生活者支援団体に、見学、ボランティア、聞き取り調査で関わったことを機縁としている。特に2016年9月からは山谷地区にフィールドを定め、配食活動を中心に支援を

続けている団体（主にひとさじの会、まりや食堂、きぼうのいえ、山谷労働者福祉会館など）にボランティアとして関わりながら論考[秋山ほか 2017]を発表した。そして 2017 年 11 月からはその中でもひとさじの会に関わりつつ、同会の中心となるおにぎりを握り、それを配るという活動を担いつつ調査を実施してきた（学生・院生は年度によって入れ替わっている）。

本稿の調査従事者は執筆者 7 名で、ひとさじの会の高瀬頌功代表と吉水事務局長に調査承諾をとり、まとまった話を聞かせていただく方には書面・口頭で調査目的等を告げた。そして 3 月までの毎回（その後、弓山を中心に月 1 回のペースで）活動に関わりながら、エピソードとそれに対する感想をカードにしたため、後日、活動の再構成を試みた。同時に白波瀬達也 [2015]、渡辺芳 [2010]、渡辺拓也 [2017] を中心に、路上生活者に関わる文献を読み進め、方法論的にはアクションリサーチやエスノグラフィを検討することとなった。

私たちの課題の中心の一つはアクションリサーチやエスノグラフィと関与型調査との差別化であった。中村和彦 [2008: 2-3] はフィールドワークや参与観察と区別して、アクションリサーチを実践者との距離に応じて援助・助言からコンサルテーション、最終的には実践の当事者となる段階を描いている。しかし私たちは僧侶であるひとさじの会の中心メンバーと貧困問題の解決という価値や目標を共有しつつも、信仰の違いや有無をはじめ、大きな隔たりも確認できる。

一方、私たちは渡辺『飯場へ』[2017] を読む中で長期間に及ぶ被調査者・実践者のただ中でのフィールドワークの中から、その「社会」を記述するエスノグラフィの可能性に魅力を感じた。特に自叙伝的記述 [花家 2012] や自己の経験を書くことが他者の経験を理解すること [高山 2017] を目指すオートエスノグラフィ⁽³⁾と近いことを志向しているという自覚も私たちには芽生えた。同時に私たちが実際に調査を進めていく過程で、ひとさじの会の活動や路上生活者を含めた被調査者・実践者に対する印象にずれが生じていることが明らかになっていった。そして 7 名という人文系論文としては多い、しかも異なる背景を有する執筆者が語り合い、自分たちの感覚や印象や見解を言語化し、違いの淵源を確認し、ばあいによっては認識が変わっていくこと自体をも議論の俎上であげた調査・記述方法こそ、多くのばあい一人の筆による（オート）エスノグラフィと異なる関与型調査の

醍醐味であると考え始めた〔岸ほか 2016〕。通常の学術誌では特殊な投稿背景かもしれないが、関与型調査が前提としている被調査者・実践者との協働を踏まえた論考、また NPO、市民団体、大学のゼミ活動などの報告の一形態として、「どう書くか」の検討に多くの時間を割くことにもなった。

調査者のうち福井と渡邊は僧侶、富澤は神職である。7 名は弓山の開講する大正大学大学院 2017 年度宗教学特講 D の受講者であるが、坂場は西欧現代哲学、河田は社会学の専攻、宮澤は学部までは臨床心理学科に所属していた産業カウンセラーである。こうした複数の視点から一つの活動を観察し、積み重ねられたエピソード集は、当然、同じ情景を眺めていても異なる印象が綴られることになる。私たちは、これをあえて平準化するのではなく、複数から見た異なる相によってひとさじの会の活動をとらえよう試みた。それはタイムラインの流れ (Timeline) と、調査者がとらえたエピソード (Episode) と、そこで調査者の発話やアクションによって起きる場の変化、あるいは調査者の自分自身との内的対話 (自己省察) による自らの変化というダイアログ (Dialogue) の 3 つの位相を同時に記述することができないかという試みである。

私たちはこれを「Tled 法」と呼び、愚直かもしれないが、2 章において本稿を 2 頁 1 枚に出力した際 (奇数頁が左、偶数頁が右)、見開きに「タイムライン」、そこでの「エピソード」、場あるいは自らの変化を促した他者や自己との「ダイアログ」をしたため、論文に実装することにつとめた。そしてそれによってこそ見えてきた知見 (同会の活動の有する宗教性と非宗教性、共有される価値、組織の有する居心地良さと所在なさ) があると考え、それを考察として 3 章以降で述べていきたい。

2. 夜回り・配食活動の人々

先述のように、ひとさじの会では15時より配食準備を進め、おおよそ19時より法要とミーティングを行い、20時より5班に分かれて夜回り・配食活動を行う。ここではその準備から22時過ぎの終了までをおっていく。

2.1 準備からおにぎり作り

15時に光照院に到着すると寺院前には「ひとさじの会」の幟が立ち、すでにスタッフ、第一月曜日にはベトナム人婦人・留學生が準備を開始している。準備は寺院内、境内、道を挟んだ倉庫で行われる。

寺院内では外陣で配食の際に一緒に提供される衣類、常備菓、飴などの鞆詰めが、その横の居間で7、8名のベトナム人婦人による揚げ春巻きの具材詰めがなされる。鞆詰めはチェックリストに従って誰でもが行えるようになっているが、衣類の在処や小分けの仕方、常備菓の種類などは馴れていないと、かなり難しい。

境内では4キロ（約2.5升）用ガス炊飯器と大型電気炊飯器で米が炊かれる（蒸らすだけの非常食米を使用することもある）。洗米から炊きあがりまでを管理する中心メンバーがいる。横にはテントが張られ、春巻きがベトナム人留學生4、5名で揚げられている。屋内の春巻き詰めもそうだが、揚げ春巻き作りはベトナム人のテリトリーになっていて、味見などで行き交いはあるものの、ベトナム人以外のボランティアが関わる雰囲気ではない。

倉庫ではおにぎり作りが行われる。境内からご飯が運ばれると、味付けわかめや鰹節などがふりかけられる。数名が1腕300グラムのご飯をはかり、数名がそれを受け取りラップで軽く握って、2名ほどがもう一度ラップをかけて保温箱に入れていく。毎回200～300個のおにぎりを作るほか、スタッフ用、小食な路上生活者のために100グラムおにぎりを数十個握る。和気あいあいとした雰囲気ですぐに4キロ炊きなら数十分でおにぎり作りは完了。手の空いたボランティアは鞆詰めや後片付け等を行い、ご飯が炊きあがると担当者が声をかけ、再び倉庫に行く。おにぎり作りは3、4回ある。

エピソード：失敗しても

おにぎり作りや衣類・常備薬等の鞆詰めは、それになりに気を遣う。おにぎりを握る際はマスクに使い捨て手袋を着用。鞆詰めはきちんと数をそろえなければならない。しかし指揮系統やマニュアルが明確にある訳ではなく、ボランティアが主体なので、間違いや勘違いも多い。「300個作るから1グラムずつ多くても1個おにぎり足りなくなるんだよね」と言われても、300グラム超のご飯が渡されたり、必要な衣類や小さなおにぎりが入っていなかったりは、よくあることだ。

ただ失敗しても原因・責任が問われることはない。スタッフのミーティングでは議題になるかもしれないが、ボランティア間では、遠慮もあってか詮索しない。ぼろぼろとご飯をこぼしたり、調理器具の洗浄が不十分だったりなど、几帳面な人とそうしたことに無頓着な人とでは、とらえ方の違いがあるだろうが、何となく「ひとさじの会」風が出来上がっているようだ。

ダイアログ：戸惑いと提案

私が初めてひとさじの会を訪問したのは11月13日だ。15時からという案内だったが、特にガイダンスもなく、手持ち無沙汰で、境内にいた古参と思しきメンバーの指示を仰ぎ、米とぎを行った。おにぎり作りはすぐに要領をつかめたものの、鞆詰めはリストを見てもよく判らなかった。リストに「ムヒ」という商品名が書かれていたり、「胃腸薬」という薬の種類だったりと不統一感も気になった。私たち初心者が多く鞆詰めに関わったせいか、夜回りの際に入っていないものが多かったような気がする。いつも配るはずの小さなおにぎりがなくて、上野公園では配食を拒否した人もいた。

12月4日の回に高瀬代表に「もうちょっと鞆詰めを判りやすくできないですかね」と、例えば整理ボックスを使うとか、薬の写真をカードにして、それと交換で鞆に詰めるとか、「職人ベストに入れてもいいですね」とも言ったのかもしれない。次の回（私は欠席したが）職人ベストが試験的に採用されて、その写真が送られてきた。ただ写真を送ってくれた坂場さんから「これまで改善策は全く考えられてこなかったのだからかと疑問に思った」との一文が添えられていた。（弓山達也）

2.2 勤行から現場へ

おにぎりや菓などの準備が終わった後は、調理に使った器具や境内のテントなどを片づける。そしてそれらが終わると吉水事務局長と高瀬代表を中心に、参加者の班分けや配食現場で合流する人たちの確認などが行われる。この間、わたしたちは特にやる事がなくなってしまうため、他の参加者と共に本堂内で休憩を取る。休憩時には、私たちは他の参加者と世間話をしたり、おにぎりや調理の際に余った春巻きなどを食べて腹ごしらえをしたりする。ちなみに、休憩後は他の参加者全員と会話できる時間があまりないため、この休憩時間は貴重な交流の場でもある。

休憩時間に入ってから 30 分ほど経つと、吉水事務局長や高瀬代表の打ち合わせも終わり、本堂で勤行が始まる。基本的には高瀬代表が導師を勤めるが、ばあいによっては吉水事務局長や他の僧侶が勤行を執り行うこともある。導師が本尊の正面に座り、私たちはその周りを囲むように座って勤行に参加する。手元にはひとさじの会オリジナルの式次第が書かれた紙が配られる。その紙には路上生活者の無事を祈る言葉などが書かれており、私たちはそれを見ながら導師に続いて書かれている言葉を唱える。途中、3 分ほど「南無阿弥陀仏」を唱える続ける間には、本堂の明かりが消され、本尊だけが仏灯の中に浮かび上がる。また、勤行の間には参加者に焼香台が回されるため、その場で焼香をしながら念仏を唱える。

勤行が終わると導師が振り返り、配食の際の注意事項を話す。この時話される注意事項は、「配食の際にはしゃがんで相手と同じ目線になって話をすること」、「寝ている人は無理矢理起こさないこと」、「大勢で相手を取り囲むように立たないこと」などである。その後そのままの流れで、休憩時間中に組まれた班分けが発表される。班分けでは参加者が、いろは会コース、浅草コース、上野コース、川沿い（墨田）コース、川沿い（台東）コースの 5 つの班に分けられ、各コース 4、5 人ほどのグループとなる。班分けの発表が終わると、私たちはコースごとの荷物を持って、配食現場へ移動する。移動の際には、いろは会コースは徒歩、それ以外のコースは僧侶の車やタクシー、電車などを利用し移動する。

エピソード：勤行の強要をしない

ひとさじの会は、寺院を拠点にしているにもかかわらず参加者の信仰や宗旨を問わない。勤行が始まる前には、必ず導師が「宗旨の違う方は無理なさらなくても結構です」といったことを参加者に呼びかけている。実際に、参加者の中に立正佼成会の会員がいた際には、その時導師だった吉水事務局長が「南無阿弥陀仏でも南無妙法蓮華経でも構いません」といったことを述べていた。

また参加者から「勤行には出たくない」といった声が上がったことはなく、皆、静かに勤行に参加している。ひとさじの会に参加する人たちの動機やきっかけはさまざまだが、その多様な参加者の間で「他人のために祈り行動すること」は共有されているのであろう。

ダイアログ：慣れることへの恐怖

休憩時間中、高瀬代表は参加者の参加歴などを考慮して班分けをしている。例えば、参加歴の長い参加者は毎回なるべく同じ班に入れ、反対に参加歴の短い参加者は毎回異なった班に入れている。これは初心者になるべく多くのコースを体験して慣れてもらうためであり、参加歴の長い参加者は初心者を手助けする役割も担っているのだ。また、配食での配布物の内容は日によって異なるため初心者は戸惑うことも多い。ベテランの参加者がそれをサポートすることで、大半の人は3、4回ほど参加すれば自然に配食ができるようになるのである。

事実、私も参加した当初は上手く配食活動ができなかった。というのも、その日は配布物の種類が多く、全ての配布物を把握できるほど余裕がなかったからだ。また活動への不安や疑念もあったため、その日私は積極的に参加することができなかった。しかし4回目に参加した際には、ほとんど一人でできるようになっていた。自分から積極的に路上生活者に声をかけ、配布物も全て漏れなく渡し切ることができるようになっていたのである。私は自分一人で配食できたことに若干の喜びを覚えた半面、自然と活動に慣れてしまっている自分自身に対して恐怖を感じた。無意識のうちに自分自身の考え方や路上生活者への接し方が変わっていたことに、私はひとさじの会の強い影響力を感じた。（坂場優）

2.3 5つの夜回り・配食コース

2.3.1 いろは会商店街コース

いろは会コースは、光照院から徒歩 10 分ほどのところにあるいろは会商店街を中心に配食を行うコースである。このコースでは、光照院から商店街を通して浅草に向かうまでの道のりを 5〜7 名ほどで回り、約 1 時間半程度で 40 人前後の路上生活者に配食を行う。

まず私たちは、荷物を持って光照院の門の前で念仏を唱えてから、徒歩で商店街へ向かう。この際私たちは、道の途中で点々と暮らしている路上生活者にも配食を行いながら商店街を目指す。いろは会コースを担当することの多い参加者はどこにどのような路上生活者がいるのかを大方知っており、時々「こっちに行きましょう」と他の参加者を誘導する。こうして点々と配食をしながら進み、しばらくして左折すると商店街に到着する。

私たちは 300 メートルほどある商店街を歩きながら、その店の軒先で一夜を過ごす一人一人に配食を行う。いろは会商店街の配食では全員で一人の路上生活者に向かって配食するのではなく、私たち全体がゆっくり商店街の中央を進みながら両脇に寝ている路上生活者へ手分けして配食を行っていく。したがって初めて参加する人であっても、ベテランの参加者にくっついて配食するというより、自主的に路上生活者に声を掛けにいかねばならないことが多い。それを踏まえてなのか、ベテランの参加者は経験の浅い参加者に「じゃああの人に渡してきて」というように仕事を振って積極的に参加できるよう気を配っている。

商店街で配食を行ったあとは、集合場所の吾妻橋のたもとに向かいながら、また点々と路上生活者への配食を行う。この際、商店街からかつて遊郭があつて今もその名残を留める旧吉原を抜けて浅草へ向かうルートと、吉原を通らずに浅草へ向かうルートの二つが存在しており、どちらのルートで向かうのかは先導する参加者が誰なのかによって異なる。いずれにしても、やはりベテランの参加者はどこにどんな人がいるのかを知っているらしく、他の参加者を誘導しながら、「ここら辺にはこんな人がいてね」といった地元の話をすることもある。また、商店街を抜けたあとの道にはあまり路上生活者がいないため、いろは会コースは他のコースよりも早めに配食を終えて集合場所に向かうことが多い。

エピソード：いろは会商店街の屋根

アーケード型のいろは会商店街には屋根がかかっていたが、老朽化を理由に 2017 年から屋根部分の撤去工事が行われ、徐々に屋根がなくなっていった。いろは会商店街の屋根は路上生活者が雨をしのげる貴重な場所だったが、今後新設される予定はなく、ひとさじの会の参加者の一人は「これからはこころ辺の路上生活者も移動せざるを得ないだろう」と話していた。

また配食準備中にも、参加者の間でこの話が挙がり、「撤去するなら新設してくれればいいのにね」といった声もあった。さらには商店街の話題を皮切りに「隅田川の方だって花火の時は邪魔だからどけていうけど、それなら代わりにいられる場所とか用意してあげればいいのに」といった話も出ており、路上生活者の居場所を心配する声は多かった。

ダイアログ：路上生活者の問題の根深さ

私はこの活動に参加した当初、ひとさじの会は路上生活者を減らすために活動している団体なのだと思っていた。なぜなら私は、路上生活者を普通の住居に暮らせるようにすることが路上生活者の問題の「解決」なのだと思っていたからである。そのため、当然ひとさじの会もそれを目標に活動しているのだろうと認識していた。

しかし活動が続けていくうちに、この認識は単なる私の思い込みにすぎなかったのだということが分かった。というのも、ある日の配食準備の際、吉水事務局長は「(路上生活者の中には) 昔からあの暮らしをしていて普通の生活の良さが分からない人や、生活保護でアパートに住んでも規則が守れず出ていく人もいる。家を与えるだけでは解決にならない」といったことを述べていたからである。私は彼の言葉に大変納得し、路上生活者の問題に対する自身の考えが甘かったことを痛感した。

同時に、私はこの言葉を聞いて以来、この活動が正しいことなのかどうかが分からなくなってしまった。なぜなら、こうした考えの下で配食を行うことは、路上生活者の現状を助長してしまうことにもつながりかねないからである。特にいろは会商店街で 20 人以上の路上生活者が寝ているのを見た時は、私は彼らの生活の維持を手助けしてしまうような活動が本当に正しいことなのか疑問に思わざるを得なかった。(坂場優)

2.3.2 浅草コース

浅草コースは、約 5～6 人で 1 時間半ほどかけて 30 名前後におにぎりを配る。ルートは、浅草駅前の吾妻橋たもとの交番から始まり、浅草寺を起点に仲見世商店街をはじめとした周囲の商店街を回る。

浅草寺の二天門にまわると、門の前で早速数人の路上生活のおじさん⁽⁴⁾たちが待っている。いつもこの場所で待っている人たちのようだ。おにぎりやお茶などを一通り渡すと、別れ際に「今日は境内にもいたから行ってやってほしい」と頼まれる。「女の子から渡されると喜ぶ」らしく、おにぎりやベトナム春巻きなどを渡す役割は女性陣が担当させられることが多い。

浅草コースでは、浅草寺の本堂前で念仏を唱える。この時間でも、まばらではあるが、参拝に訪れた観光客の姿がある。そんな浅草寺の境内にも、先ほどの話の通りおじさんがいた。しかし、2012 年の路上生活者同士の殺人事件以降、境内では支援活動が禁止されているため、おにぎりを渡すだけでも境内の隅にある暗がりまで来てもらう必要があった。

浅草寺を出てからは、仲見世商店街の裏を縫うように、周囲の商店街を回る。道端に段ボールを敷いている人はいるが、川沿いコースで見かける段ボールハウスのような住まいはない。シャッターの閉まった店の軒先や四つ角で立って待っているおじさんも多く、服装も一見して路上生活者だとは分からない人もいる。浅草コースを熟知した参加者ですら、判断できないこともある。

この辺りでは最後のアーケード付き商店街となる新仲見世商店街を最後にまわる。昼は観光客であふれているが、さすがに 21 時近くは人通りもまばらである。しかし、営業中の飲食店もまだあり、活動をしていると通りかかる人たちの視線を感じざるを得ない。

22 時を過ぎるとシャッターが閉まり始め、新仲見世商店街に路上生活者が集まってくる。浅草のおじさんたちが比較的軽装で鞆やリュックをもっているのは、こうした移動生活を送っているためだろう。しかし、どの店舗にも「店の前での寝泊まり等を禁ずる」という注意書きが書かれている。商店街を挙げた路上生活者追放運動が行われてきたことが伝わってくる。雷門を抜けスタート地点まで歩き、配食は終了する。

エピソード：おじさん達のいるところ

配食の道すがら、ベテランのボランティアさんたちから、浅草の路上生活者事情を聞かせてもらう。そのひとつを紹介すると、2012年の東京スカイツリー完成時には、多くの路上生活者が浅草を追われたという。それに対し「観光地にはいないということ」と語る参加者もいる。観光地としての浅草がホームレスを排除している側面もあるようだ。

浅草コースを主に担当する僧侶は、「こういう明るいところにいる人は明るい人が多い。逆に、いろは商店街みたいな暗いところにいる人は一人でいることを好む。怖い人もいる」と語る。たしかに他のコースに比べ、浅草は積極的に話しかけてくる人が多い。「師匠なんですよ」と間柄を教えてくれた2人組のおじさんや、男女のペア、なかには酒気を帯びて数人で談笑しているグループもいる。街の環境に応じて、路上生活者の人となりの傾向も異なるようだ。

ダイアログ：人々の視線

浅草コースをまわっていると、観光客や街の人々の視線を意識せざるを得ない。苦々しげにおじさんたちを睨みつける若い男性、配食活動を興味深そうに眺めていく外国人観光客、足早に通り過ぎながらもいぶかしげな視線を投げってくる通行人たち。あまりにもぶしつけな視線は、やはり気持ちのいいものではない。

私はこれまで、街中で路上生活者を見かけても、「そこにいる」ことを知りつつ「見えない＝見ないように」振舞うことに慣れきっていた。だからこそ、ひとさじの会の活動に参加して、おじさんたちの側から視線を受けたとき、まるで「お前らがいないければ」と訴えるかのような冷たい視線には驚いた。

ある時、仕事帰りらしきスーツ姿の男性に「なんでしてるの？」と声をかけられた。そのいぶかしげな視線は、おにぎりを配る私たちに向けられたものだった。私たちもその理由を調べに来ている。しかし、通りがかる人々からすれば、私たちも路上生活者の側に立つ支援者である。すでに私も、活動中だけとはいえ、おじさんたちの側であることに馴染んでいた。だからこそ、その時ずっと「お腹がすいているからですよ」と、ひとさじの会の一員として答えられたのだろう。（河田純一）

2.3.3 上野コース

上野コースは上野駅周辺と上野公園内を回り、8～10名で約80名の路上生活者に2時間かけておにぎりを渡す。このコースは全コースの中で最も配食範囲が広い。

上野コースは、地下鉄で浅草駅から上野駅へ移動し、配食が開始される。また、このコースは広範囲のため吉水事務局長の班と、2012年から活動に参加している方（以下、サプリーダー）の班に参加者が振り分けられる。上野駅までの交通費はサプリーダーが参加者に回数カードを渡し、配食のスタート地点まで誘導する。

配食のルートは上野駅周辺と上野公園内である。上野駅周辺では高架下のバス停や上野駅出口付近で寝ている路上生活者に配食するが、ひとさじの会を段ボールから出て待っている人が多い。人通りは多いが、路上生活者は大方決まった場所で寝ているため、人通りの中を探すことなく配食できる。また、駅の周辺には屋根があるところが多く、「寝床」を確保しやすいようだ。

その後、上野公園へ移動し配食する。公園内の路上生活者の多くは複数名で固まって寝ている。そのためおにぎりを渡す際は、おじさんに「隣で寝ている人にも渡した？」と聞かれることも多い。竹の台の噴水付近にある繁みの中や不忍池周辺など、上野公園内は「寝床」となる場所が至る所にある。特に東京文化会館の周辺では、雨よけとなる軒があり、同館が消灯すると路上生活者が「寝床」を作りに軒下に集まっていいという「暗黙の了解」があるようだ。入口付近では毎回10人程度の路上生活者がひとさじの会を待っている。配所も終盤なので、私たちとちょっとした交流会のようになることもある。

また、サプリーダーは毎回、文化会館の軒下で寝ている女性と会話をしている。しかし、2016年頃までその女性と一切口を利くことはなかったらしい。きっかけは、2014年の東京文化会館の改修工事にあるが、2人が会話するまでの過程はエピソードで紹介する。

公園内の配食が終わると、上野駅のパンダ橋出口で2班は合流し、ミーティングのために車と地下鉄で浅草駅まで向かう。

エピソード：文化会館のおばさん

2014年、東京文化会館の改修工事のため、軒下に「寝床」があった人達は別の場所へ移動せざるを得なかった。そのため、文化会館のおばさんも立ち退く前、配食に來た参加者に「工事中は〇〇（移動先）の方にいる」と伝え、参加者は「そちらにも行きますよ」と応えた。

しかし、その情報が正確に共有されていなかったため、配食には誰も来ることはなかった。この件に激怒した文化会館のおばさんは、おにぎりを受け取らなくなったのである。

その数ヶ月後、文化会館に戻ったおばさんに事情を知らなかった参加者が声をかけてしまった。するとおばさんは参加者に対して怒りをぶつけてきた。その際、サブリリーダーがおばさんの怒りをしばらく受け止めた。すると、怒りばかりではなく、「あなた達もご苦労様だと思うのよ」という言葉や活動に対してお礼を言ってくれた。

その日からサブリリーダーは文化会館に到着すると、おばさんへ声をかけるようになり、女性同士にしか判らない悩みや家族の思い出など会話する間柄となった。文化会館のおばさんは毎回ひとさじの会のお出迎えとお見送りをしている。

ダイアログ：無関心だった私

上野駅周辺は会社帰りや外食後の方々で人通りが溢れている。そのため駅周辺で配食する際、多くの人の視界に入ることには避けられない。しかし、他人から配食の様子を見られることはあっても、それに対してクレームをつけられることやトラブルが起こることはなかった。私も特に周りの目を気にすることなく配食を続けていた。

ふと、配食中に上野駅の様子を見渡すと、駅を利用する通行人にとって路上生活者は「素通りしてしまう存在」として扱われているようだった。それは、通行人が路上生活者に無関心であることを確認できると同時に、私も普段、路上生活者の存在に関心が低かったことを突き付けられる瞬間でもあった。神職の資格を持ちながら、調査という機会を得て、実際に自分の眼で見て感じ、考えるというプロセスを経なかったならば、このような実感は湧くことはなかっただろう。（富澤明久）

2.3.4 川沿い（墨田）コース

川沿い（墨田）コースは「川沿いランニングコース」と呼ばれるルートで、隅田川の白髭橋から吾妻橋までの墨田区側高架下沿いである。5～6人で回り、約30名の路上生活者に、約2時間かけておにぎりを配る。

参加者はまず、光照院から5分程タクシーに乗り、白髭橋手前で下車する。そして簡単な荷物の確認などを行い、その場で念仏を唱える。高架下を川沿いに5分程歩くとブルーシートで囲まれた路上生活者達の「家」が見えてくる。家は高速道路を支える柱の横に造られており、川に臨む形となっている。いろは商店街ではシャッター沿いに並ぶ、吹きさらしの寝袋や段ボールで囲うのみの「寝床」ばかりであるのに対し、隅田川沿いでは全面を身長程の高さまでブルーシートが覆う「家」が並んでいる。中間地点までは2メートル強のコンクリート塀が川沿いに並んでいるため、暗い印象である。また高架下のため、上を通る車の音にかき消されないように「ひとさじの会です、おにぎりをお持ちしました」と大きな声で言わなければならない。また頑なおにぎりを受け取らない路上生活者もいるため、おにぎりを渡しても問題ないかチェックシートを確認しながら進まなくてはならない。

中間地点である桜橋付近からはコンクリート塀がなくなり、川の両サイドの街並みが見えてくるので、明るい印象となる。ここまで来ると、川とは反対方向にある、道路を挟んだ公園沿いにいる路上生活者へもおにぎりを配る。こちら側ではブルーシートの「家」を持つ路上生活者は1人もおらず、風晒しに寝ている人ばかりである。

その際、隅田公園内は奥まで立ち入らない。私たちが参加した時には常連の参加者に止められた。過去、配食のために隅田公園内に立ち寄った参加者が、数人の路上生活者らしき人を見つけたため、声を掛けようとしたら、走って追いかけられたという出来事があったためだという。

最後に墨田区役所、スーパードライ・ホールを片目に吾妻橋まで歩く。この辺りでは時々土手の花壇の中に隠れるようにして寝ている路上生活者がいる。そのため、見落とさぬように、注意を払いながら歩かなくてはならない。その後、吾妻橋を渡り、22時頃に浅草駅にある交番裏へ到着する。

エピソード：火災現場で念仏

桜橋手前的高架下には、フェンスで囲われた区間がある。その区間は跨道橋になっており、天井が近い。そこで2017年2月に火事があった。原因はストーブの火だとされている。この火事で路上生活者が1人亡くなった。現在でも天井には焦げ跡が残っている。白髭橋近くには、火災の際に隣に暮らしており、衣服が燃やされてしまい大変だったと語る路上生活者もいる。その路上生活者は現在、ブルーシートの「家」に住まい、ストーブや大きい透明な衣装ケースなどが置いてあるという生活を送っている。

12月4日当時は、同行していた浄土宗僧侶が火災について説明し、「強制はしませんが、手を合わせられる人は手を合わせて、お十念をお称えしたいと思います」といい、火災現場前で念仏を唱えた。メンバーは、その僧侶、日本人参加者1人、ベトナム人の参加者3人に加えて私であったが、いずれも躊躇いなく手を合わせていた。

ダイアログ：僧侶として参加すること

配食では各コースに1人は浄土宗僧侶が指名される。中心メンバーは毎回どのコースを回るのが程度決まっているようである。

12月4日以降、2回隅田川沿いを担当する機会があった。当時はまだ会への参加は4回目であったが、川沿いコースのメンバーに私以外の浄土宗僧侶がいなかった。そのため、浄土宗僧侶でもある私は、同行した参加者から配食前の念仏や、再度火災現場に立ち寄った際に念仏の導師役をつとめるよう促された。加えて、おにぎり等の数量確認など中心的役割を求められた。

また、炊き出しにおいて、初めは調査者・学生として参加したつもりであった。しかし浄土宗僧侶でもあることを伝えたところ、周囲の私に対する態度が変わり、身の上話に加え、雑談中でも宗教者としての意見や知識を求められるようになった。

浄土宗僧侶であることを伝えたことで、周囲の接し方が変わり、参加回数が少ないにも関わらず、コースの浄土宗僧侶として音頭などを任されたりするなど、突然宗教者としてのふるまいを求められることに若干の「戸惑い」を感じるところが多くあった。(渡邊龍彦)

2.3.5 川沿い（台東）コース

川沿い（台東）コースは、隅田川白鬚橋から吾妻橋までの台東区側であり、途中から隅田公園内となる。このコースでは、20 人ほどの路上生活者に約 1 時間 30 分かけておにぎりを渡す。配食活動の人数は 4～6 人である。

現地までは光照院からタクシーで向かう。5 分ほどで配食のスタート地点に着き全員で配食を行う。現地では、持ち物と路上生活者と接する際の注意事項を確認し念仏を唱えるのがルーティンとなっている。このコースは、高瀬代表が担当することが多く、路上生活者との交わりも多い。

コース前半部は公園がなく、また浅草から遠い地点に位置していることもあり路上生活者の数は少ない。しかし、この場所にも定住している路上生活者がいる。彼らの「家」からはラジオの音や白熱灯の明かりが漏れており、生活感があることが外からも判る。配食をしていると隅田川の水位の高さに驚く。梅雨のような時期が続くと川は増水するであろう。このことを高瀬代表に伝えてみると、やはり台風の際には隅田川が増水し、路上生活者が飼っていた猫が流されてしまったそうだ。猫を飼っている路上生活者は少なくなく、別の支援団体は SNS でキャットフードの提供を呼びかけているほどだ。こうした路上生活者のエピソードに耳を傾けるのも重要な活動の一つである。

コース後半部はトンネルや遊歩公園があり、路上生活者が比較的多く生活している。ここの路上生活者の段ボールハウスは簡易的なものが多く、ひとさじの会の存在を知らない若年の日雇い労働者もいる。トンネルは人通りも多く防犯用の白熱灯が設置されているが、路上生活者たちは淡々と生活しているように思われる。公園内では、ひとさじの会の活動を知っている「常連」の路上生活者もいる。路上生活者の雰囲気もどこか明るく、前半部と比べ会話が弾みやすい。

22 時頃になる配食を済ませた参加者が集合し活動報告が行われる。この時、初参加者は活動の感想を述べるのが慣例となっており、後述のように路上生活者と交流できたことへの驚き、人間としての尊厳、つながりの大切さを重んじるような発言が目立つ。そして最後に念仏を唱え、配食活動の 1 日が終わる。

エピソード：中心メンバーと路上生活者の親密性

1人あたりの配食ペースというのは、だいたい5分ぐらいである。したがって、数回参加しただけではどこに誰がいるという把握ができないのはもちろんのこと、真摯に向き合って会話することもできない。私は持病を持っている路上生活者に「温かいお茶はいりませんか」と尋ねたところ首を横に振られた。断られた挙句、話すらできなかった。中心メンバーにそのことを相談してみると、彼は女性がいる時は気分をよくし時には似顔絵を描いてくれるそうだ。この日は男性4人だったため少し機嫌を損ねていたのであろう。

次の配食時にも彼はいた。すると一緒に配食していた高瀬代表が彼に近づいていくと急に会話が弾むようになった。その後、私たちは30分ぐらい話をしている高瀬代表に「先に行つといて」と言われ、代表を1人にして集合場所へ向かった。このように高瀬代表をはじめとするひとさじの会の中心メンバーは相手のほとんどの顔を覚え、どこにだれがいるかを熟知しているである。おにぎりを渡す行為は誰にでもできるが、中心メンバーと共に行動すると自分の不甲斐なさを感じる反面一緒に行動すると心強い。こうした路上生活者とコアメンバーの親密な関係は、ひとさじの会が10年近く絶やさず活動してきたことを物語っているのではなかろうか。

ダイアログ：調査中に生まれた葛藤

私がひとさじの会に参加したきっかけは、「葬式仏教」と揶揄される仏教が現代においてどのような社会実践ができるのか興味があったからである。加えて私自身も僧籍も有し、研究も反戦僧侶の名誉回復運動を扱っている。このように社会実践を行う仏教に関心を持ちながらも、ひとさじの会のような活動を自坊で展開できるのかということを考えてみると、それは非常に難しいと感じる。

それは日々の勤行や檀家への対応に時間が割かれていき、社会実践がなかなかできないという時間的制約が理由としてあげられるが、月2回の配食活動を路上生活者に対し継続的に行なう覚悟や責任が自分にはまだないからであろう。宗教者の社会実践に興味がありつつもそれを実装していく難しさを、関与型調査を通して痛感した。（福井敬）

3. 宗教性、価値、そして共同性

前章では、ひとさじの会の路上生活者支援を、平均的な流れ、特徴的なエピソード、各調査者の関与とその影響、それに伴う調査者自体の内面的変化をダイアログとして報告した。記載したエピソードとダイアログの内容については、執筆者たちで論議を重ねた。その過程で浮き彫りになったのが「宗教性と非宗教性」「共有される価値」「組織の有する居心地良さと所在なさ」という3つの知見である。

3.1 宗教性と非宗教性

これまで見てきたようにひとさじの会の特徴は、浄土宗の寺院で配食準備が行われること、宗派の教えや法要・供養等の宗教的な儀礼などが夜回り・配食活動に盛り込まれていることである。ただ参加者の動機は必ずしも信仰に基づいたものではない。1.問題の所在で示したように、ひとさじの会には僧侶の数をはるかに上回る非宗教のボランティアが参加している。そこで本節では、まず同会の活動を、寺沢 [2015:310] が「私的な祈りが直接的にボランティア活動を促すという欧米諸国の知見と同様の傾向（略）また仏壇や神棚の前での祈りが直接的にボランティア活動を促すという日本の知見」として注目した「祈り」（神棚・仏壇前での私的実践）を中心に検討していく。次いで稲場圭信 [2011a: 15] が「無自覚に漠然と抱く自己を超えたものとのつながりの感覚と、先祖、神仏、世間に対して持つおかげ様の念」と定式化した「無自覚の宗教性」からも検討してみたい。「無自覚の宗教性」については「神仏のご加護で生かされているという感謝の念が、おかげ様という感覚が、人を謙虚にし、自分の命と同様に他者の命も尊重させる」として、日本人の精神的基層にある和、つながり、思いやりの要素がボランティア活動の動機として語られることを稲場 [2011b:125-129] は指摘している。

ひとさじの会の路上生活者支援活動においてみられる祈りの場は、本堂での法要、配食終了後のミーティングや路上生活者が亡くなった現場などで行われる念仏である。法要では東日本大震災や熊本地震からの復興、路上生活者と路上生活者支援団体とその日に行われる配食活動の無事が祈念

される。ただこのときの参加者の祈りへの関わりには大きな幅が観察される。仏灯に照らし出された阿弥陀仏に向かって一心に念仏を唱える僧侶、初参加ではその光景に異様さを感じ合掌できなかった男性、5年ほど参加している女性が眠ってしまう場面も見られた。しかし本堂を出て、夜回りに移ると、路上生活者が亡くなった現場では、2.3.4 川沿い（墨田）コースのエピソードにもあるように参加者はみな躊躇いなく手を合わせている姿が確認される。

このように法要での祈りには、参加者の宗派もしくは仏教へのコミットメントの度合いによる違いがあるだろう。さらに僧侶においても、ひとさじの会の祈りに対して同じ感覚を有している訳ではない。浄土宗僧侶である渡邊の2.3.4 川沿い（墨田）のダイアログにおいては、同宗派といえ導師的な役割を与えられることに戸惑いを感じる事が吐露された。祈りとは異なるが、浄土真宗本願寺派の僧侶である福井が2.3.5 川沿い（台東）のダイアログで報告しているように、社会実践に興味がある僧侶でさえもひとさじの会の活動には担い難さと距離を感じている。それに対し路上生活者が亡くなった現場における祈りでは、そうした違いは希薄である。ひとさじの会の動員力を考えるうえで重要なことは、路上生活者の安寧やいのちのかけがいのなさという参加者が共有できる祈りから、宗派意識や関わり度の度合いに応じた祈りが用意され、いずれも強要されることがないという点であろう。

浅草コースのリーダーを任されたり、配食準備では参加者から指示を仰がれたりするなど、同会の僧侶からも参加者からも頼りにされている8年間活動を続けている女性がいる。彼女は「宗教なのに強要しないことが活動に参加し続けられている理由」と語る。参加動機が「講義の課題」と述べる学生たちが、気兼ねなく参加できるのもこのためであろう。宗教への関心が表立ってはみられない彼／彼女らは、光照院で行われる配食準備にはほとんど参加しない。ただ学生たちは配食活動が終わった際のミーティングでは異なる様相を見せ、「おじさんたちも私たちと同じ人間であることが分かった」「おじさんの手は温かった」「ありがとうと言われて嬉しかった」など、路上生活者のいのちの尊厳とつながりを回復するような気づきを口にする⁵⁾。

いのちの尊厳やつながりというテーマ自体は、中学校の道徳の学習指導

要領にも出てくる「思いやり、感謝」「相互理解、寛容」「命の尊さ」など、宗教的というより、むしろ道徳的な性格のものとされよう。しかし宗教に関わらない者からすると夜遅くの街頭で輪になって語られるいのちの尊厳やつながりの宣揚は極めて宗教的でもある。先に見た祈りの幅の広さと同様に市井の人々がふと口にしてしまういのちの尊厳やつながりの宣揚は、路上生活者への夜回りと配食を僧侶とともにいうという体験から導きだれたとも言えよう。そこには漠然と抱いていたいのちの大切さ、つながりの感覚、おかげ様の念といった稲場のいう「無自覚の宗教性」が横たわっていて、ひとさじの会がこうした宗教性を顕在化させ、思わず手を合わせたり、口をついて言語化されたりしていると見ていいだろう。

3.2 共有される価値（貧困とジェンダーに関する意識の格差）

ひとさじの会の参加者には、その活動を通じて一定の価値が共有されている。ひとさじの会が掲げるミッションは、その名前に明確に示されているとおり「たった一匙ぐらいのわずかな支援しかできないかもしれないが、それでも困っている人に寄り添いたい」というものだ。より活動に即して言えば、夜回りと配食を通じて「路上生活者のいのちの尊厳を守り」、そして彼／彼女らに「寄り添う」ことである〔吉水 2015、高瀬 2016〕。こうした組織としてのミッションは、中心メンバーの僧侶たちから出発前の法要や配食後のミーティング、川沿い（墨田）で記された物故者への祈りの場において繰り返し語られる。

しかし、ひとさじの会で共有される価値は、こうした儀式によって一方的に伝えられ構成されているわけではない。佐藤恵〔2002〕や渡辺〔2010〕はボランティア団体におけるミッションを、「つねにそこに立ち返り、再解釈・再確認されるべき準拠点として」〔佐藤 2002: 54〕捉え、「ミッションの再帰性」と呼ぶ。ひとさじの会の「いのちの尊厳を守り」「寄り添う」というミッションも同様に、他の参加者や配食活動での路上生活者との相互行為を通して再帰的に個々の参加者に埋め込まれていくものである。

それでは 2 章の私たちの報告から、ひとさじの会において、どのような価値が共有され、その活動を特徴づけているのかを見ていこう。

高瀬代表や吉水事務局長は、「おにぎり一つから会話が生まれ」そこから打ち解けて身の上話をする関係の構築を目指している〔高瀬 2016: 192〕。

こうした配食活動をコミュニケーションの糸口とする「寄り添う」姿勢は、特に吉水事務局長から勤行やミーティングで繰り返しボランティアに語られている。上野コースのエピソードにあったサブリーダーと文化会館のおばさんの関係は、その価値観が結実した一つの結果ともいえる。しかし、川沿い（台東）コースのエピソードにあるように、多くのボランティアが配食の時間的制約もあり、声かけや「体調はいかがですか」といった決まりきった問いかけに終始してしまっているのも事実である。

ひとさじの会で共有される価値は、路上生活者に対する呼称にもみとれる。ひとさじの会では、公的には「路上生活者」を用いているものの、実際の活動においては彼らを「おじさん」と呼んでいる。この「おじさん」という呼び方は、他の路上生活者支援組織でも用いられており、路上生活者支援に共通する被支援者との距離感の近さを物語っている⁽⁶⁾。私たちの報告でもしばしば使われているように、ひとさじの会でも中心メンバーだけでなくほとんどの参加者が、活動を通じてこの呼び方を用いるようになる。この「おじさん」という呼び方は、参加者の一体感を作り出す。しかしそれ以上に、「おじさん」と呼ぶことによって、経験の浅い参加者に対しても路上生活者に対する親近感を演出し、「おじさん」に寄り添う者としての自覚を促す。

しかし、こうした「おじさん」に寄り添う姿勢を醸し出す会の仕組みは、一見して固定的な性役割（gender role）に基づく価値観を共有することにもつながる。浅草コースの本文や川沿い（台東）コースのエピソードにあるように、路上生活者の中には、男性よりも女性の参加者（特に大学生のような若い女性）と接することを楽しみにしているとされる。「女の子から渡されると喜ぶ」からと、手渡し役割を女性に担当させることがある。バレンタインデーの前の会では、「若い女性」のみが総出でチョコにメッセージを書き、おじさんに手渡すことが要請された。こうした女性に男性のケアの役割を求める性別役割分業観に異論は出ず、かかる「中年男性中心文化」というべき価値観は、ひとさじの会と、そこに集う参加者には、ほぼ無自覚に共有されている。

ひとさじの会のような社会貢献活動に積極的な団体は、ともすれば「高い人権意識」を分け持っているかのように捉えられるかもしれない。しかし実際には、ひとさじの会のように「貧困」「健康と福祉」「いのちの尊厳」

といったその組織の活動にとって中心的課題については繰り返し問い直されながらも、「ジェンダー平等」のような活動にとって周辺的な課題は脇に置かれがちである。ひとさじの会では、個々の「おじさんたちのいのちの尊厳を守り、寄り添う」という想いは、活動を通じて主題化され再帰的に共有される。しかしその一方で、固定的なジェンダー観は、路上生活者を救うという価値の背景に埋没してしまい、参加者一女性参加者自身も、そして私たち自身も一の間で無自覚に強制し／されてしまうのである⁷⁾。

これまでひとさじの会が掲げる「路上生活者に寄り添う」というミッションが、実際の活動を通じて参加者の間でいかに再帰的に共有されているのかを確認してきた。しかし、共有された価値観は明文化されたミッションの中にあるだけではない。ひとさじの会では、2.1 準備からおにぎり作りのエピソード（医薬品等の鞆詰めやご飯の計量）にあるように、「失敗しても」特に問題視されない。この「失敗しても」という価値観は、ボランティアの敷居を下げ、言語の壁のあるベトナム人をはじめとした多様な参加者を受け入れることを可能にしている。さらに、この価値観は、経済的あるいは家族との関係において、さまざまな形で「失敗してきた」、あるいは現状「失敗している」とみなされがちな路上生活者に「寄り添う」姿勢にも通底するものである。

3.3 組織の有する居心地良さと所在なさ

本節では、ひとさじの会の一見矛盾する居心地良さと所在なさに注目し、参加者の流動性や作業の非効率性などさまざまな特性を備えていることを示しつつ、しなやかに対応できる力をも併せ持っているを見ていきたい。

ひとさじの会の参加者を見ると、檀家・地元住民・ベトナム人留学生・学生・教員・看護師・新宗教の信者など多様な人々が参加でき、開放的であることが判る。また、参加者は固定されておらず活動時間に間にあえば誰でも参加することができる流動的な組織形態となっている。

一方で、ひとさじの会の参加者からは所在なさも指摘される。そもそも1.2 本稿の対象とする団体とその活動で触れたように役員全員が浄土宗僧侶であることは、一定の宗教的価値観に偏っているため閉鎖的にとらえられがちである。活動・実践にも目を向けると、配食前・配食場所への移動後・

配食後には、必ず浄土宗式の法要を行う。初参加者への研修なども特に行われず、時折、初参加者は何をしたらいいか判らない状態に陥る。活動マニュアルもなく、初心者は見よう見まねで行動しなければならない。

しかしそのことはかえって参加者の自発性が要求されることにもなる。参加者の自発性が発揮された事例として、次のような市販薬の取り扱いに関して指摘したエピソードがあげよう。看護師として勤務する、ある参加者が、いくら市販薬であっても扱い方によっては命を落とす危険性もあるため、路上生活者に薬品を配る時は細心の注意が必要であることを配食中に指摘したことがあった。そこで、ひとさじの会は看護師を招いて市販薬の扱い方に関する勉強会を実施し意識改革に努め、現場で生かす試みを行なっている。2.1 準備からおにぎり作りのダイアログでも弓山の提案が簡単に受け入れられ実行に移された様子が書かれている。これらは、参加者が中心メンバーに対して自由に意見を言えるという組織の有する居心地良さが功を奏した一例だといえる。

その他にも非効率な作業の利点は見受けられる。それが19時頃から始まる法要前の休憩時間である。この時間帯は一見無駄な時間のように思われるが、参加者同士が交流できる絶好の機会となっている。この際、参加者同士でのコミュニケーションが生まれ、それぞれがどのような背景で参加しているかを共有することができ、初心者にとっては夜回りの不安の解消、参加者同士の連帯感が生まれる仕組みとなっている。

このように、ひとさじの会は特定の宗教的価値観に依拠しているため閉鎖的な性格を帯びがちであるにも関わらず、参加者の出入りは流動的な組織形態となっている。参加者に対しては、とりわけ研修やマニュアルもなく作業も非効率なことが多く、組織の脆弱性がしばしば指摘されるであろう。しかし、こうした脆弱性と非効率性や参加者の流動性こそが、時には組織の活動自体を促進させ持続的な活動を可能とする重要な要素となっているのだ。非効率や流動性が存在しているがゆえに、参加者の自発性や連帯感が要求され、それらが醸成されるのである。さらに参加者の意見を積極的に取り入れる寛容性もひとさじの会には備わっている。このように、ひとさじの会は固定的な組織形態ではなく、さまざまな要素を含みうる「しなやかな」組織形態となっている。

「しなやかさ」（レジリエンス）とは、さまざまな分野で検討されてきて

いるが、『柳の枝』にたとえられていたように、回復する力、つまり元の状態に戻る力」のことを指す〔和泉 2015: 11〕。加えてゾッリとヒーリーは「しなやかさ」（レジリエンス）を「絶えず変化する環境に合わせて流動的に自らの姿を変えつつ、目的を達成する」〔ゾッリ、ヒーリー2013: 19〕と説明している。これらを踏まえ、ひとさじの会の組織について言及すると、同会には、さまざまな状況に対してしなやかに適応・対応する能力が備わっているため、参加者の流動性や排他性といった脆弱性がさほど問題にはなっていないのだ。

ひとさじの会は居心地良さと所在なさという相反する側面を備えつつも、多様性に対して柔軟に対応しており、「しなやかさ」（レジリエンス）を持つ組織であるとみることができる。そして、それが同会の活動を継続的に実施できる一つの要因となっているのではなかろうか。

4. まとめと今後の課題

本稿の目的は浄土宗寺院を拠点に路上生活者支援を行うひとさじの会に焦点を当て、そこに集うボランティアがどのような宗教性や価値を共有し、共同性を醸し出しているか、裏を返せば、なぜ宗教性や価値を共有せずとも一つの運動体としての共同性を保つことが可能なのかを明らかにすることであった。これを関与型調査を用いて、私たち 7 名のボランティア体験自体も含め、中心メンバーへのインタビュー、ボランティアのエピソードなどをカードにデータ化し共有して、検討を重ねてきた。

ひとさじの会の参加者の多くは非宗教者であり、こうした人々が、なぜ労働運動系、市民活動系などの支援団体の中から、特定宗派に根ざしたひとさじの会を選び取るのだろうか。前述したようにひとさじの会の宗教性はまず浄土宗の宗派意識として法要等に現れる。それは、非宗教者はもちろんであるが、僧侶、中には浄土宗僧侶でさえ距離感をもって受け止められたり、敷居の高いものとして感じられたりすることがある。

その一方で、参加者には宗教儀礼を強制しない、他宗教の祈りも受け入れるという、宗教的行為に対して自由な面も併せ持っている。しかしここで留意しなければならないのは、ひとさじの会が浄土宗のみならず、他宗

派僧侶、他宗教信者、非宗教者を糾合できる背景には、「無自覚の宗教性」がある点である。夜間に僧侶とともに山谷地区、隅田川沿い、浅草寺に連なる商店街や旧吉原を歩き、路上生活者の過酷な生活実態、凄惨な事故のエピソードに触れるとき、「無自覚の宗教性」は私たちを含め、その場に居合わせるボランティアに思わず手を合わせる態度を要請する。あるいは初めての参加者がいのちの尊厳やつながりといった言葉を思わず口をついて出てきてしまう感慨を与える。ひとさじの会が労働運動系、市民活動系、そして同じ宗教観で構成された支援団体と違う点は、ここにあると言っていいだろう。加えていのちの尊厳やつながり以上に会としての明確なビジョンや時には行動パターンも参加者に押しつけないことも、ひとさじの会が他団体と異なるところ考えられる。

こうした「無自覚の宗教性」の体験は、ボランティアに共同性を与えようとする。これに加え、路上生活者を「おじさん」と呼ぶ情緒的な一体感や1回のボランティアとしては長時間（15時から22時過ぎ）のほぼ立ちっぱなしの活動が参加者に苦楽をともにする連帯感を与える。同時に法要で、路上で、さまざまな場面で路上生活者に対するいのちの尊厳や寄り添いが語られる。私たちはひとさじの会にたどり着くまで、いくつかの労働運動系、キリスト教系の支援団体でボランティアに従事したが、実際にひとさじの会ほど路上生活者と接する場面（話し込む、「家」の中を垣間見る、叱られる、体調をうかがう）がある団体はなかった。これはひとさじの会が「地域のお寺」発の支援団体であるという安心感・安定感にも由来していると考えられる。

ただ、この安心感・安定感が日本においてドミナントな「中年男性中心文化」に根ざしていることにも注意しなければならない。性別によって期待された役割を若い女性にのみ押しつけ固定化しようとする風潮に私たち自身も抗うことができなかった。貧困に対する意識の高さとジェンダー平等についての鈍感さは矛盾なく同居し、この微温的・寛容的な雰囲気が一ひとさじの会の敷居を低くし、女性を含め多くのボランティアを恒常的に集めるに至った一因になっているとも考えられるのである。

こうした相反する人権感覚とともに、組織のあり方にも矛盾する側面が同居している。これまで見てきたような誰でもが参加できるひとさじの会の居心地良さは、メンバーシップもマニュアルも説明もない所在なさや表

裏一体となっている。しかしこの居心地良さと所在なさは参加者に創意工夫と自発性を発揮させる契機にもなっている。ところがこの創意工夫と自発性は、先のマニュアルの不在と相まって、時に無秩序と無駄につながりやすい。だがこうした活動の非効率性をも受け入れる緩さ／緩やかさも、ひとさじの会は持っている。以上の組織の有する居心地良さ（入退会の自由さや自発性の喚起）と所在なさ（初心者への配慮のなさや活動の非効率性）を兼ね備えていることが、多様性に対して柔軟に対応する「しなやかさ」（レジリエンス）につながっていると見ていいだろう。

以上、ひとさじの会の宗教性と非宗教性、共有される価値（貧困とジェンダーに関する意識の格差）、組織の有する居心地良さと所在なさといった一見矛盾する性格は、私たちが広範な参加者とのボランティアを通して観察し、インタビューやエピソードを収集したことによって、そして何よりも私たち自身のボランティア体験をも検討の俎上にあげることによって得られた知見である。

ただ次のことも大きな課題として私たちの前に横たわっている。それは、こうした関与型調査によって得られた知見が、どのように貧困問題の解決につながっているかということである。私たちが、あえて「関与型」といって、信仰や価値を異にする実践者との連携を模索するのは、彼／彼女らの目指すところと、実践と研究という違いがあるにせよ、何らかの共同歩調をとることが可能であるという前提があった。本稿がこうした実践者との連携の一助、目標の接近になったかという点極めて心許ない。問題解決の手法として関与型調査の洗練をはかることが私たちに求められている。同時に東京五輪・パラリンピックを2年後に控え、再開発が進む山谷地区において、立ち退きを余儀なくされた路上生活者の行方にも注目する必要があるだろう。ひとさじの会をはじめとする支援団体の果たす役割などについて、より一層自覚的になり、今後引き続き調査、考察を進めていきたい。

[謝辞] 本稿を完成させるにあたって、ひとさじの会の夜回り・配食活動については「宗教と社会貢献」研究会で、Tled法については「宗教と社会」学会で発表をさせていただいた。調査を許可いただいたひとさじの

会と合わせて感謝申しあげたい。

註

- (1) 戦後の山谷地区の変容、言い換えれば山谷地区が日雇労働者の街から生活保護受給者と路上生活者の街になるプロセスを瞥見することは容易ではないが、川上昌子編（2005）、鈴木富之（2011）、城北労働・福祉センター（2018）に詳しい。これらによれば、1964年の東京五輪時に簡易宿所宿泊者数が約15,000名とピークを迎え、オイルショック、バブル崩壊で大きく人口減少し、1995年に6,123名、2005年に5,074名、2016年には4,184名となっている。川上はこのうち約半数が生活保護受給者であるとし、城北労働・福祉センターは60歳以上が78.5%であるとする。なお同センターの調査によれば、路上生活者数を山谷地区に隅田川流域、浅草周辺、南千住・三ノ輪を加えて200名前後とみなしている。
ひとさじの会が夜回りを行うのは山谷地区、上野、隅田川流域、浅草周辺といった主に台東区エリアになる。私たちも参加した市民団体 ARCH [2018] による深夜の調査（東京ストリートカウント）によると2017年8月で台東区の路上生活者は281名であり、新宿区の347名に次いで多い。実際、ひとさじの会も台東区エリアだけでも200個を越えるおにぎりを用意する。
- (2) 日本宗教学会パネル「関与型研究の可能性と課題」2017年、「震災後の宗教とコミュニティ関与型調査からの再考察」2016年、JSPS 科研費 JP17H02273「復興期における震災文化の研究—宗教研究からのアプローチと実践—」2017-19年（いずれも弓山が代表）。
- (3) その時はオートエスノグラフィにたどり着くことはなかったが、現時点では私たちの関与型調査はオートエスノグラフィの手法に極めて近いことに気づき、そこに収斂させていくのか、差異化をはかるのか、今後の検討としたいと考えている。
- (4) 私たちが接した路上生活者については「おじさん」の語を用いたい。この呼称については3-1 および註6を参照。
- (5) ひとさじの会のウェブサイトには、初めての参加者を中心とする体験談が掲載されており、ここでも同様の体験談を見ることができる。
- (6) 例えば、山谷地区で無料診療を含めた活動をしている山友会や、池袋を中心に活動する TENOHASHI の活動報告でも使われている
(<https://ameblo.jp/sanyukai1984/entry-12299735633.html> と <https://tenohasi.exblog.jp/29623649> を参照。2018年3月20日閲覧)。また、関西の活動では「おっちゃん」が用いられている [下野 2017]。
- (7) 2013年に山谷玉姫公園の夏祭りで起きたセクハラ発言に対して、支援団体はこれを厳粛に受け止め「反省文」を山谷夏祭り実行委員会名でビラにしたためている。ひとさじの会も勉強会等に対応している。

参考文献

ARCH 制作・行 2018『2017年東京ストリートカウントプロジェクト報告書』。

- 秋山真人、城野兼一、富澤明久、福井敬、宮澤寛幸、弓山達也 2017 「「ドヤ街」と宗教—山谷におけるホームレス支援の現状と課題—」『宗教学年報』32 大正大学宗教学会、133-169。
- 和泉浩 2015 「地域のレジリエンスにおけるソーシャル・キャピタルと記憶—東日本大震災後の地域コミュニティについての議論をもとに—」『秋田大学教育文化学部研究紀要』70, 9-22。
- 稲場圭信 2011a 「無自覚の宗教性とソーシャル・キャピタル」『宗教と社会貢献』1 宗教と社会貢献学会、3-26。
- 稲場圭信 2011b 『利他主義と宗教』弘文堂。
- 遠藤興一 1996 「山谷の歴史—都市下層社会研究序説—」『明治学院論叢』575 明治学院大学社会学会、125-215。
- 川上昌子編 2005 『日本におけるホームレスの実態』学文社。
- 岸政彦、石岡丈昇、丸山里美 2016 『質的調査の方法：他者の合理性の社会学』有斐閣。
- 桜井政成 2002 「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析—京都市内のボランティアを対象とした調査より—」*The Nonprofit Review*, 2(2)。
- 佐藤恵 2002 「障害者支援ボランティアにおけるミッションの再帰性と「支え合い」の技法」『社会学評論』53(2), 247-261。
- 下野祇園 2017 「"釜"(かま)のおっちゃんたちの夏」『福祉のひろば』211, 1-4。
- 城北労働・福祉センター編・刊 2018 『平成 29 年度事業案内』。
- 白波瀬達也 2015 『宗教の社会貢献を問い直す—ホームレス支援の現場から—』ナカニシヤ出版。
- 鈴木富之 2011 「東京山谷地域における宿泊施設の変容— 外国人旅行客およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に —」『地学雑誌』120(3)。
- アンドリュー・ゾリ、アン・マリー・ヒーリー 2013 『レジリエンス復活力—あらゆるシステムの破綻と回復を分けるものは何か—』ダイヤモンド社。
- 高瀬顕功 2016 「ホームを失って生きる—路上生活者の語りから—」『喪失とともに生きる—対話する死生学—』ポラーノ出版、168-208。
- 高山真 2017 「ライフヒストリーとオープンキャンパス」『哲學』138。
- 寺沢重法 2012a 「現代日本における宗教とボランティア活動—JGSS（日本版 General Social Surveys）の計量分析から—」『次世代人文社会研究』8 韓日次世代学術フォーラム、207-226。
- 寺沢重法 2012b 「宗教参加と社会活動」『現代社会学研究』25、北海道社会学会 55-72。
- 寺沢重法 2013 「現代日本における宗教と社会活動—JGSS 累積データ 2000~2002 の分析から—」『日本版総合的社会調査共同研究拠点研究論文集』13 日本版総合

的社会調査共同研究拠点大阪商業大学 JGSS 研究センター、129-140。

東京都山谷福祉センター・刊 1963『山谷地域の簡易宿泊所に宿泊する就学児童の実態とその対策』。

東京都城北福祉センター1971『山谷「現況と歴史」』佐竹印刷。

東京都福祉保健局 2018 更新「路上生活者対策」。

<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/seikatsu/rojo/index.html> (2018 年 9 月 1 日閲覧)

中村和彦 2008「アクションリサーチとは何か」『人間関係研究』7。

花家彩子 2012「演劇経験を教育的に評価するための研究方法としてのオートエスノグラフィーの可能性」『学校教育学研究論集』25。

三谷はるよ 2014「日本人の宗教性とボランティア行動:非教団所属者における拡散的宗教性の影響」『ソシオロジ』58 (3) ソシオロジ編集委員会・社会学研究会、3-18。

三谷はるよ 2016『ボランティアを生みだすもの—利他の計量社会学—』有斐閣。

吉水岳彦 2015「仏教者による生活困窮者支援—戦後の浅草山谷地域を中心に—」『日本仏教学会年報』81、78-107。

渡辺芳 2010『自立の呪縛—ホームレス支援の社会学—』新泉社。

渡辺拓也 2017『飯場へ—暮らしと仕事を記録する—』洛北出版。